

生き方部会

I. 研究の概要

1. 研究課題

「子ども達が自己を見つめ、互いに認め合う心を育む教育はどうあるべきか」

2. 研究内容

【研究内容 1】

互いに思いあう心を育むボランティア教育の実践

- ア. ボランティア
- イ. 福祉
- ウ. ユニバーサルスポーツ

【研究内容 2】

自己実現を支援し、自他の生命を尊重する教育の在り方

- ア. コミュニケーション
- イ. カウンセリング

3. 研究方法

- (1) 交流計画
研究内容領域ごとに二つの分科会に分け、各分科会で討議実践交流、意見交流を行う。
- (2) 分科会構成
 - ① ボランティア教育分科会
 - ② コミュニケーション分科会
- (3) 研究協議会の内容・方法（取り消し線は今年度行えなかったもの）
 - ・ ~~南北合同開催での研究協議会を持つ~~
 - ・ ~~今年度の会場について、ボランティア分科会は北広島市立大曲東小学校、コミュニケーション分科会は北広島市立緑陽中学校とする~~
 - ・ 2つの分科会でそれぞれに実践発表や講演、レポート交流などを行う。

Ⅱ. 実践研究の経過と成果

1. 実践研究の経過

日付	会議名・取り組み	内容
5月14日	第1回役員研修会	今年度の研究計画の概要確認
6月中旬	部会だより No. 76 配布	
7月 2日	第1回課題部会事務局長研修会	今年度の研究内容の確認など →この会議を受け、役員で実践方法を検討・決定
7月中旬	部会だよ No. 77 配布	
10月13日	第2回役員研修会	レポート集の作成、送付

2. 本年度の実践について

(1) 概要

本年度はコロナウイルスの影響を鑑み、一人ひとりが実践した内容をレポートにまとめ、レポート集という形で実践を交流した。

(2) 第1分科会 ボランティア教育 の実践について

①実践・レポートについて

「アダプテッドスポーツの講演と実技講習の振り返り」と「講演と実演を踏まえた実践」について、各自でレポートを作成した。今年度は課題部会を持つことができなく、丁合したものを配布し、読んで理解を深めてもらう形となったので、ここにはレポートの内容について記載する。

アダプテッドスポーツは、ルールややり方を実践者に合わせ、障がいのあるなしに関係なく、みんなが一緒に楽しめるスポーツを目指すという考え方であることに、多くの先生方が共感していた。これまでの生き方部会では、いくつかの競技についての学習と体験の機会があり、その中でも自校で実施できそうなものTOP3に挙げたのが、ボッチャ、フライングディスク、スポーツ吹き矢であった。特にボッチャについては、学校予算で購入して、既に実施済という学校があった。小中両方での実践があったので、実施が難しそうだと躊躇していた学校でも取り入れることができそうである。また、カローリングという、床の上でカーリングを行う競技を、市から器具を借りて実施した様子も紹介されていた。調べてみると、カローリングセットはボッチャセットの約6倍の金額で販売されている高価なものであった。購入が難しくても、実践例のようにレンタルできると競技の幅が広がってよいと考える。

最後に、「学級通信」で先生自身が生き方部会で学んできたことをわかりやすく紹介し、子どもたちの心に届けている実践例があった。子どもたちのパラリンピックを見る視点が変わるかもしれないという思いを抱き、多くの支えがあってこそ活動が認められ、大きな活動につながっているということを日常生活にも置き換えて伝えていた。集うことができなくても、身体を動かすことができなくても、読んで感じて学ぶことができる大切さに気づかされた。



【ボッチャ】



② 成果と課題

レポート交流を通しての成果については①に記載の通り。課題については、アダプテッドスポーツの道具を使用したいが学校予算で購入できない場合に、借りることができる施設や使用料なども共有できるとよい。また、特別な道具がなくても学校で実施できる競技についての交流があると、各校で取り入れやすいものが増えてよいと考える。

(3) 第2分科会 コミュニケーション の実践について

① 昨年度の課題研究協議会の内容

講師に高塚人志氏を招き講演や実践を行った。講師は元鳥取大学医学部准教授であり、医学部生にコミュニケーションに関する実践を行ってきた方である。「コミュニケーションを重視するならば、教育では話すことより聞くことを大切にすべき。なぜなら、聞いてくれるという安心感があれば、心を開いて話すことができから。」という提言のもと、実践を行った。内容は、明日からすぐに使えるアイスウォームであったが、実践する中で部会員たちも徐々に緊張が解け、お互いに楽しく関わるようになった。まさに「聞いてくれるという安心感」を作り出すことが必要不可欠であると実感できる実践であった。

② 今年度のレポート内容について

レポートテーマは「子ども同士をつなげる方法や実践例」「子どもと教師をつなげる方法や実践例」「コミュニケーションに関わって困っていること」であったが、内容は大きく以下の3つに分かれた。

ア. 昨年度の実践のような、日常の学級活動、教科指導にひと工夫を加えたコミュニケーション活動

イ. 保健室でのひと工夫・苦労について

ウ. 学活・道徳・教科指導など、コミュニケーションに関わる1時間（1単元）の授業展開

アに関するレポートが1番多く、昨年度の実践で行った弁慶さん、こぶたぬきつねこ・パイナップルでペアなどの実践があった。「弁慶さんは教師主導でやりやすい」「2人1組で相手との関係が大事」「中学生でも意外と反応がある」「朝、帰りの会などすきま時間に短時間で行うのがよい」などの報告があった。また、先生方が日頃実践しているひと工夫についてもたくさんの実践があった。お題を決めてペアで1分間トーク、ペアを決めて相手に質問し感想を述べ合う、ほめほめりレー、今週のスター、ぱっと行動支援絵カードの使い方、学級日誌で絵しりとり、当番のふり返りで周りの子どもに評価させる（ほめてもらう）、夢日誌、成長の記録、教科のプリントにフリースペースを作ってやりとりするなどがあり、新たに実践できそうな内容が多くあった。

イに関するレポートは、保健室に来やすい環境作りと密になって来室することを防ぐコロナ対策が相反する場合があります、各校での工夫や苦労が報告された。保健だよりを使った実践や、登下校時の玄関でのあいさつや、休み時間に廊下巡視や、相談しにきてよいことを伝えることなど多岐にわたった。また、来渋りの子どもへの対応についても報告があり、その時にどう対応するかによって次のさらなる行動につながるかどうかが決まることについてもまとめられていた。

ウに関するレポートは、学活・道徳におけるエンカウンターの実践や、国語科におけるスピーチの実践について報告があった。また、特別支援学級では日々相手の気持ちを考えることを大切にしており、授業展開や日頃のちょっとした積み重ねについての実践報告があった。

③ 今年度の成果と課題

レポートには新たに実践できそうな内容が多数記載されており、教師と子どもが、また子どもと子どもが新たにつながったり、つながりが強くなったりすることがさらに期待できるものとなった。子どもは自分だけにかけてくれる言葉を必要としている場合があることや、「距離感」が大切であることなどが改めて感じられた。また、コロナ渦において各校がどのような現状なのかを交流できたこと、どのように工夫しているか・苦勞しているかを共有・共感できたことが成果である（それを求めたレポートもあった）。課題としては、単発で行うよりは、系統立てて、教師集団で、意図的にしかけを作ることが大切であること、当たり前と思うことをしっかりと行ってそれを続けることが大切であることなどが挙げられる。教師（集団）が意図をもって子どもたちを育てることは簡単なことではないが、積み重ねが大切であることは間違いない。今年度の実践が、私たちがよりよいものを求めてちょっとチャレンジしてみたり、工夫することをやめたりしないことの一助となったと考える。

Ⅲ. 部会研究の成果と課題

1. 成果

今年度は、講師を招いて理論研究や実技演習を行うことはできなかった。しかし、分科会でそれぞれテーマを決め、各学校で実践したことをレポートにまとめることができたことは大きな成果である。また、レポートから新たに実践できる内容が多数記載されていることから、自校で実践したり、工夫したりすることで良いものになっている。今後も新たな視点や考えを共有する機会を大切にしながら、部会の研究をより深めていきたい。

2. 課題

来年度は、どのような形で部会を行うことができるかわからないが、どんな形であっても教師が学び続けていくことが大切である。今年度の取り組みを続けながら、それぞれ部会員が各学校でできることを実践し、レポートとして積み重ねていくことが重要となる。講師を招いての研究会が行われた際には、研究内容を決め、講師の選定を行い、講演や実技演習で新たな視点が得られるようにしていきたい。そのために、研究会がより良いものになっていくように、今後も検討していきたい。

（文責 小野寺 彩）